

## 論文審査の結果の要旨

氏名：大沢 聖子

博士の専攻分野の名称：博士（歯学）

論文題名：学生自身による同意取得が及ぼす認知、感情、態度に関する行動科学的評価

審査委員：（主査） 教授 河相 安彦  
（副査） 教授 葛西 一貴  
教授 伊藤 孝訓

急性疾患から慢性疾患へと疾病構造が変化し、さらに患者の人権意識の高まりから、従来の医療モデル、すなわち Biomedical Model（生物医学モデル）が、疾患中心あるいは医師中心の医療として批判されるようになってきた。そこで患者の心理・社会的側面を重視しながら、患者に対して全人的にアプローチする患者中心の医療や全人的医療が求められるようになり、Biopsychosocial Model（生物心理社会モデル）が提唱された。行動科学は人間を全人的に理解しようとする学際的な科学であり、患者の心理・社会的側面をも含めた全人的医療の実践においては、中心的な役割を果たす学問領域といわれている。

日本大学松戸歯学部 of 患者付き添い実習（以下、付き添い実習）において、学生が患者との対話を通して、全人的にアプローチすることは、全人的医療や Narrative based Medicine を実践する第一歩となる。しかし、患者にとっては教育の対象としての役割は本来の目的ではないため、患者の認知、心理面に配慮する必要があるが、付き添い実習における具体的行動としての同意取得者の違いについて比較・検討した報告はみられない。そこで本研究の著者は、研究 1 として学生自身による同意取得が患者や学生の認知、態度に関してどのように影響を及ぼすかについて行動科学的な評価を行い、指導教員が同意取得を行った場合と、学生自身が同意取得を行った場合の差異を明らかにした。また、付き添い実習後に学生は、医師の振り返り（省察）の一手法である Significant Event Analysis (SEA) を用いて振り返りを行っているが、著者はこの言語化された振り返りの内容を分析し、研究 2 では SEA の振り返りの深さから認知面の評価を行い、さらに振り返りの深さと感情の関連についての行動科学的評価を行った。

研究 1：対象は 2015 年度と 2016 年度の 3 年次生（それぞれ 127 名、128 名）、付き添い実習に協力の同意を得た本学付属病院の再診患者（それぞれ 127 名、128 名）である。2015 年度は付き添いの協力依頼と同意取得を指導教員が行い、2016 年度は学生自身が行った。患者アンケートは自記式、無記名で、診療終了後に返信用封筒とともに学生が手渡し、郵送で回収した。学生アンケートは、実習終了後に記名式で行った。アンケートは、患者・学生の共通質問を含め「良い」「どちらでもない」「悪い」を選択肢とし、著者を含む当講座の教員 2 名が質的・量的に分析した。統計解析は、2015 年度と 2016 年度の患者アンケートの回収率・有効回答率および自由記述の記載率については  $\chi^2$  検定と調整済み残差による分析を行い、2015 年度と 2016 年度の各アンケートの回答および自由記述の評価の比較は Wilcoxon の順位和検定を行った。有意水準はいずれも 5% とした。その結果、学生自身が同意取得を行った 2016 年度は、1 回で同意を得られなかった学生が 1 名いた。患者アンケートの回収率は 2015 年度が 67.7%、2016 年度が 81.3% で 2016 年度の回収率が多く、有意な差を認めた。有効回答率についても 2015 年度が 63.8%、2016 年度が 81.3% で、2016 年度の有効回答率が多く、有意な差を認めた。患者アンケートおよび学生アンケートの内容では、学生の態度、プライバシーへの配慮などの項目で 2016 年度の方が「良い」が多く、有意な差を認めた。

研究 2：対象は 2016 年度 3 年次生 128 名である。付き添い実習終了直後に SEA による振り返りを記述させた。振り返りの深さについては、著者を含む当講座の教員 2 名が Moon の評価を大林らに準じて 1~4 点に点数化した。具体的には 1 点（振り返りをしていない）、2 点（振り返っているが 2 つ以上の視点からの振り返りが無い）、3 点（多様な見方から俯瞰している）、4 点（多様な見方、かつ批判的省察）である。振り返りの深さと感情の関連については、WordMiner® Ver. 1.5（日本電子計算株式会社®、東京）で感情用語を抽出し、テキストマイニングを行った。統計解析は、感情と振り返りの深さの点数の対応分析を行った。

SEA の振り返りの深さを Moon の評価により点数化した結果、128 名中 1 点が 18 名(14.1%)、2 点 59 名(46.0%)、3 点 50 名(39.1%)、4 点 1 名(0.8%)であった。SEA の「感情」としては、21 種類の感情があげられた。対応分析の結果、深い振り返りをしている 3 点以上の学生は、「違和感」「怒り」「いらだち」「焦り」のような感情と近接していた。「違和感」「怒り」「いらだち」「焦り」などの感情とともにネガティブな出来事の記述をした学生は、深い振り返りをしていることが示唆された。

以上の結果から、本論文の著者は学生自身の同意取得という行為により、患者・学生の双方の意識や態度を変えることに繋がり、認知、態度面に変容を及ぼすと結論づけている。また付き添い実習後の学生が記載した SEA から、「違和感」「怒り」「いらだち」「焦り」などの感情とともにネガティブな出来事を記述した学生は、より深い振り返りをしていることが明らかになった。本研究は、学生自身による同意取得が及ぼす影響について、認知、感情、態度の側面から行動科学的に評価し、全人的医療に関わる新たな知見を得たものであり、歯学の行動科学の発展に大きく寄与するものである。

よって本論文は、博士（歯学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令和元年 12 月 19 日